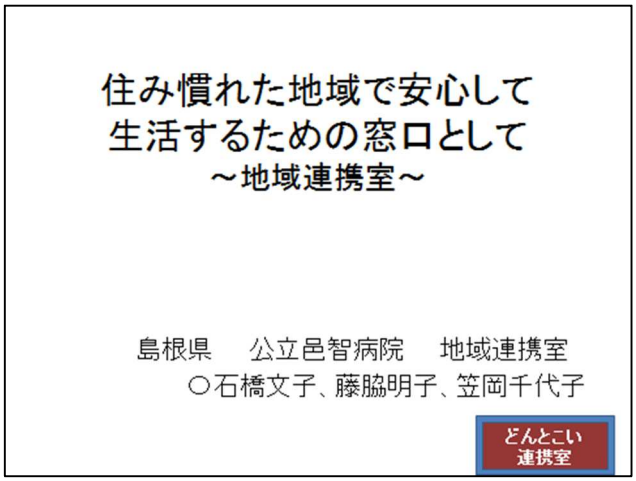
演題 250	住み慣れた地域で安心して生活するための窓口として　～地域連携室～
	発　表　者　石橋 文子（島根県　公立邑智病院） 共同研究者　藤脇 明子、笠岡 千代子

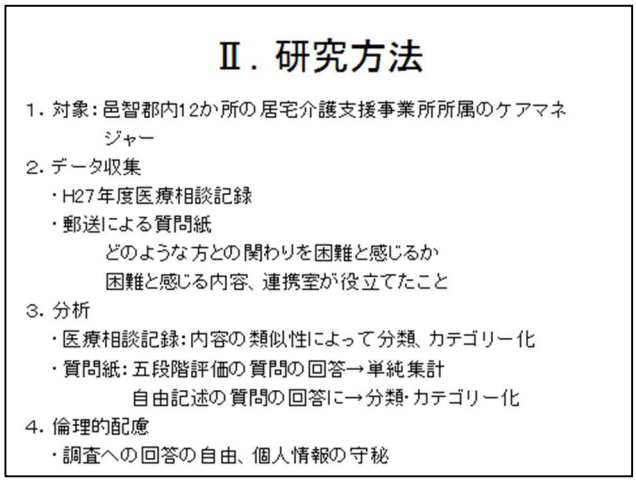


Ⅰ．はじめに

当病院のある邑智郡の高齢化率は 44.5%であり、そのうち高齢夫婦・高齢独居世帯は約 20%と高く、要介護者や認知症がある人が年々多くなっている。

そのため当院には、医療と福祉、地域との連携を図り地域住民が安心して住み慣れた地域で生活できるよう支援する役割が求められている。その窓口として地域連携室（以下連携室と略す）があり、平成 20 年に開設して以来、地域との連携に力を注いできた。病院との連携が多い居宅ケアマネジャー（以下ケアマネジャーと略す）の基礎職種が近年、医療系から福祉系へと変化してきている傾向があると言われている。連携室では、ケアマネジャーと密な連携が図れるよう、顔の見える関係作りに取り組んできた。その結果、ケアマネジャーからの相談件数も増加し、平成 27 年度の医療相談件数は約 1,700 件であった。

目的：住民が住み慣れた地域で安心して生活するために、病院の窓口として連携室に求められている役割を考察し報告します。



Ⅱ．研究方法

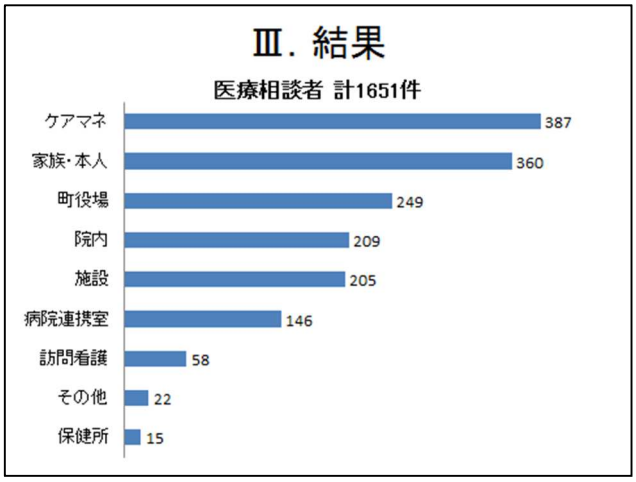
1．対象：邑智郡内 12 か所の居宅介護支援事業所所属のケアマネジャーです。

2．データ収集は H27 年度医療相談記録と郵送による質問紙です（どのような方との関わりを困難と感じるかまた、困難と感じる内容、連携室が役立てたこと）

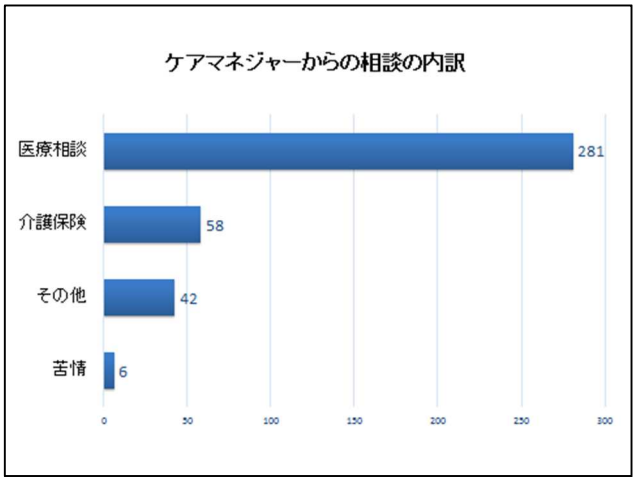
3．分析：医療相談記録：内容の類似性によって分類、カテゴリー化と質問紙：五段階評価の質問の回答を単純集計、自由記述の質問の回答に→分類・カテゴリー化

4．倫理的配慮：調査への回答の自由、個人情報の守秘

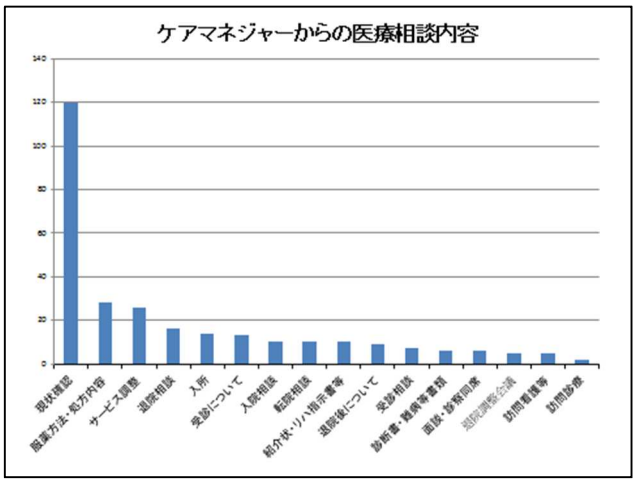
Ⅲ．結果



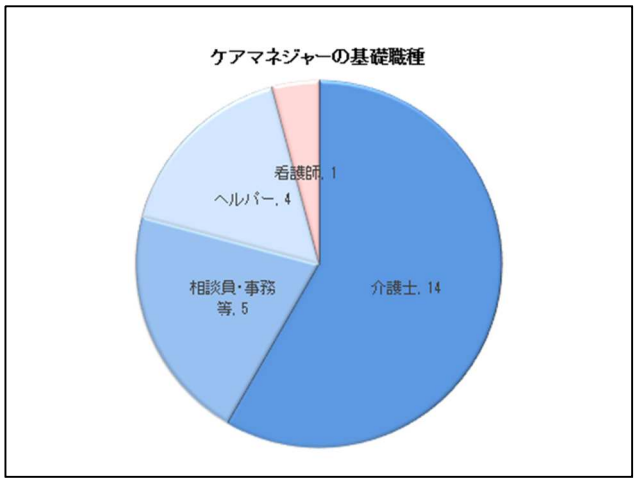
・医療相談者数は 1,651 件で、ケアマネジャーが一番多く 387 件でした。



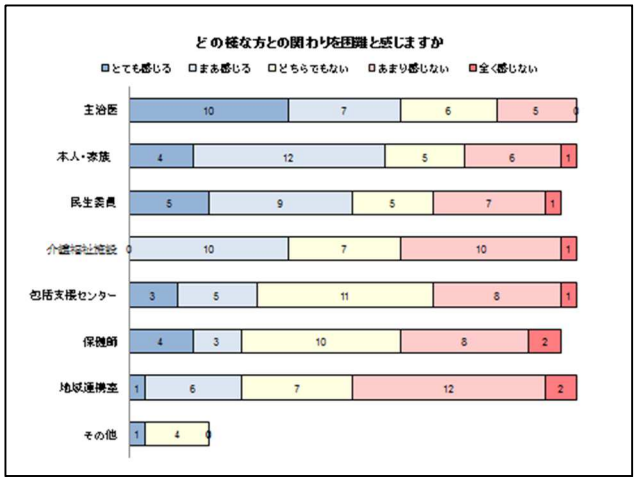
・相談の内訳は約 73%が医療相談であった



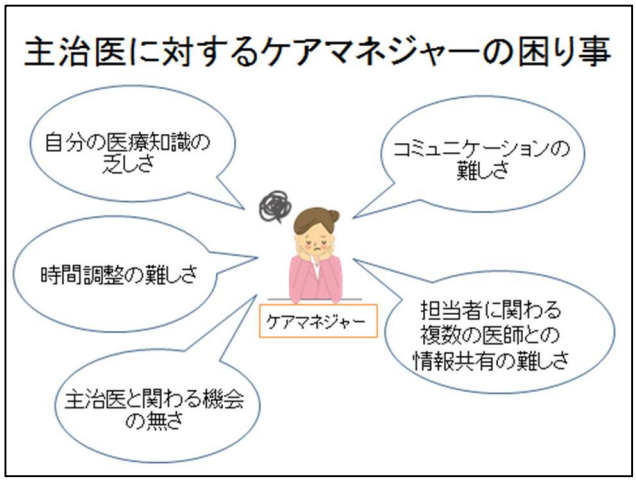
・様々な内容の相談が寄せられていたことが分かった。



・ケアマネジャーの基礎職種は、ほとんどの方が福祉系ケアマネジャーであった。

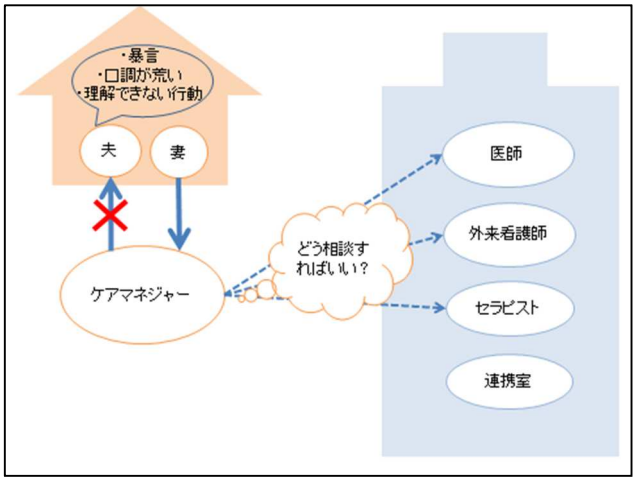


・関わりを困難と感じる対象者の回答をスライドに示します。主治医との関わりを困難と感じるとの回答が一番多い結果となった。

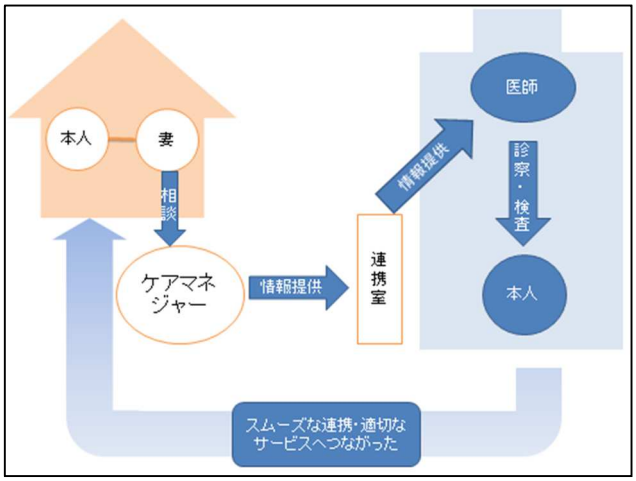


・主治医との関係を苦手としている背景には、自身の医療知識が乏しい、コミュニケーションがとりにくい、担当者の主治医が複数いて情報共有が難しい、忙しいイメージで時間調整が困難など様々な理由が

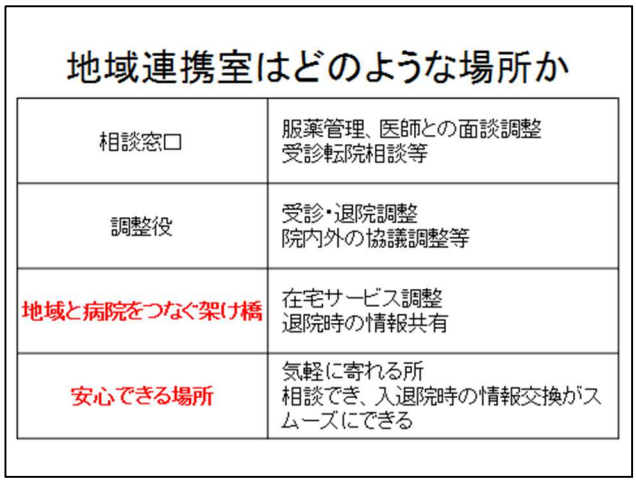
挙げられた。



・ケアマネジャーの記述の中で医師との関わりを含めた困難事例を紹介します。高齢夫婦で夫が暴言や理解できない行動するため困っていると妻からケアマネジャーへ相談があった。ケアマネジャーは主治医へ相談したいと思ったが、直接医師や看護師へ、どう伝えればいいか悩み言うことを躊躇していた。

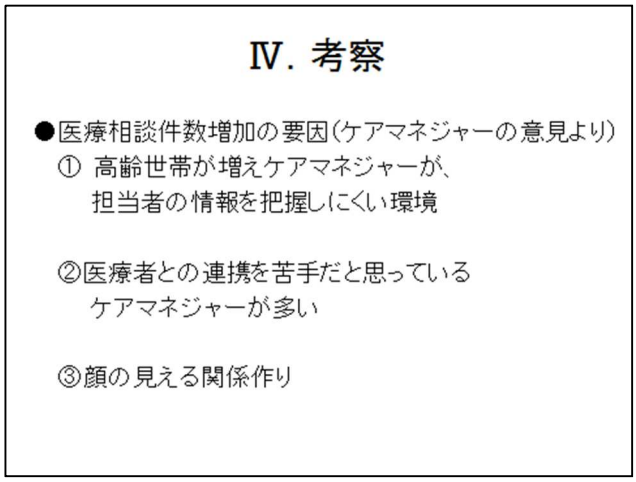


・連携室へ在宅で困っていたことや妻が認知症の検査をして欲しいことなど相談があり、主治医へその情報を事前に伝え、診察してもらった。その結果、認知症の検査や新たな薬が始まった。一連のスムーズな連携を図ることで、在宅でのサービスへつなぐことが出来た。このことで本人や妻が在宅で安心して生活できる支援ができたのではないかと考える。



・ケアマネジャーにとって連携室は、地域と病院をつなぐ架け橋、また気軽に立ち寄れ安心できる場所と認識されていることが分かった。

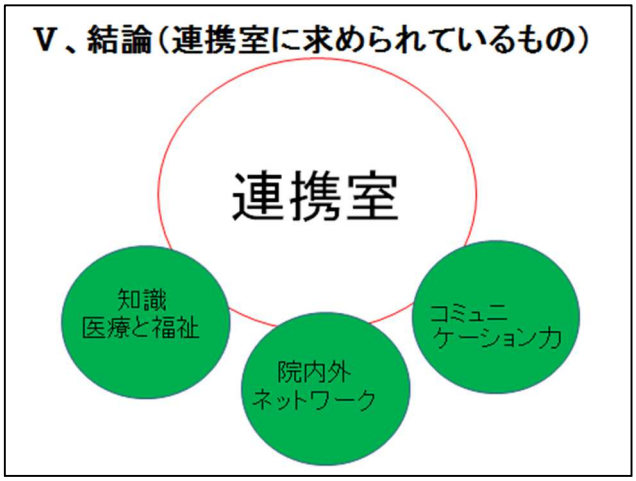
・当院では月に一度、担当患者の困りごとについての情報交換会を行っている。



Ⅳ．考察

相談件数の増えた要因として、患者本人から医療情報を得にくくなっている現状や、主治医との連携を苦手としているケアマネジャーが多くなっている

ことから明らかとなった。また情報交換会を通して、病院の敷居を低くし連携しやすい環境を作ったことで顔の見える関係作りが出来き、相談しやすくなったことも大きな要因になったと考える。



Ⅴ．結論

分析から多様化する相談内容に対し、医療と福祉両方の知識を兼ね備えて相談に対応できること、また院・内外とのネットワークを活用できる技術を持っている事、そして相談者の思いを引き出すコミュニケーション力が求められていることが明らかとなった。

様々な相談に対応できる総合力を兼ね備えた「どんとこい連携室」であり続けられるよう今後も努力していきたいと思う。